

幕末期宇和島藩の動向(13)

—— 伊達宗城を中心に ——

三 好 昌 文

前号 (第 12 巻第 5 号)

C) 第二次幕長戦争～王政復古

イ) 第二次幕長戦争

宇和島藩の出兵

富国強兵の強化と英公使パークスの訪問

アーネスト・サトウの訪問

ウ) 宇和島藩の割拠体制

対英接近と軍制改革

臨戦態勢の強化

本号エ) 王政復古と藩内事情

軍備と貿易・献金

四侯会議の失敗

雄藩大名の動向

大政奉還

おわりに

エ) 王政復古と藩内事情

軍備と貿易・献金

慶応 3 年 9 月朔日、内海（江戸湾）警衛三之台場の任

についていた信田市郎兵衛ら 30 人余が褒賞されてい

る。¹⁾ この守備兵は桑折駿河・桜田出雲の配下に置かれ、江戸に駐在していた。8

日、西園寺雪江が実兄源八郎を同伴の上、土州表へ使者を命ぜられ 10 日に出発

した。²⁾ これは、幕府の長州再征の失敗、岩倉具視の策謀による薩長両藩を中軸と

する討幕派の武力を背景とした王政復古計画の一環であり、一橋慶喜の奏聞により諸侯召集が決定されたことに関連するものである。この諸侯会議は、山内容堂が西園寺に托した宗城宛書翰に、「(○前略) 僕出京の一条御催促、他事これなく大閉口の至、(○中略) 徒然にて出京仕り候とも国家の大著眼これなくては出京の甲斐御座なく候」と述べているように、成立の可能性はなく、公武合体策は時代遅れとなっていた³⁾。

同月18日、大坂留守居役水野八左衛門は、宇和島藩に京都警衛が幕府から命ぜられたのに対し、宗城は先月下旬帰邑したばかりであり、「実ニ莫大之入費ニ而、差向上京之手当ニ必死ト差支、当惑至極寿存候」と辞退している⁴⁾。22日、一昨年春以来長崎詰として「西洋諸藩其外諸国為見分」を勤めていた萩森徹助が「異人応対諸藩突合向」のため、音信贈答、衣服の調達も物価騰貴のなかで嵩み、今度帰郷を命ぜられて長崎での借金は整理したが、物産方からの借入金80両余が残っていると訴えている⁵⁾。これは、長崎貿易の側面を示している。28日には林玖十郎が京都留守居役を命ぜられ、10月5日に乗船している⁶⁾。

10月2日、蒸気船方で、玉置兎毛・尾川半左衛門らが銅金銀の分離を始めた⁷⁾。これは今田銅山産出の銅鉱石を利用し、国産品を創始しようとしたのであろう。同日、岡野助左衛門(文久3年正月大坂留守居役、慶応2年7月御免、3年9月5日開産方出勤・諸事差配)・柳沢三郎兵衛は開産方出席、諸事差配を命ぜられたが、「役所成立御出入之義等、前後調合致候処、案外御太造ノ事ニテ、屹度器量モ有之候得者、何等ト取計筋モ可有之候処、日増老衰、殊ニ小量ノ身分、商法ハ猶更疎々シク、行末御為ニ相成候様、差配行届義共不被存、(○中略) 何欵不都合ノ義モ在之、即今一日モ早ク良策無之テハ、商会ノ興廃莫太ノ御損失ニモ相拘、極々肝要ノ節ニ候処、右躰ノ次第ニテ、此マヽ打過候者却而不忠之義、如何トモ当惑至極」として、屋川は就任を辞退し、成田五郎七が開産方引受として柳沢と相談することになった。尾川は国内外の情勢、藩財政に精通したと考えられる人物だが、宇和島藩の殖産興業は長崎貿易を含めて成功の可能性は乏しかった。7日、川之石浦渡辺治右衛門・同浦松田重右衛門・八幡浜浦

菊池清治・同浦健蔵が商法御用掛に任ぜられ、蠟方・蒸気船方の配下に入った⁸⁾。9日には賀来幸右衛門・上田亮太郎・市原元右衛門も長崎から帰着している⁹⁾。開産丸は近く新谷・西条両藩から産物移入のため帰国するとされ、藩は長崎貿易の維持に汲々としている様子が分かる。

銅鉾石の問題については、松根図書の『京都行覚』¹⁰⁾に、図書が上京の途中、慶応3年10月23日、矢野組日土村^{いまで}今田の清水庄右衛門方へ寄り、カタネ銅山・竹の首銅山を見分し坑内にも入っている。11月7日着坂、以来藩邸留守居役馬島善右衛門らの他に、御庄組城辺村庄屋矢野安芸三郎・物産方雇人松尾寅之助(臣善)・鴻池市兵衛に度々会っている。松根の任務は山階宮らの公家、薩摩藩士吉井幸輔(友実)・小松帯刀・町田民部らと時局について接渉する他に、国産物の販売、ことに銅地金の売却があったと見られる。同2年11月15日付松根宛五代才助書翰に¹¹⁾「此節弓削伝左衛門と申もの、尊藩御出産の銅地金申受度趣ニ而」と、銅の増産を希望し、五代・松尾・矢野らが動いているのである。

10月25日夜、土佐藩使者が来藩し、西園寺雪江が応接している。すでに13日、老中板倉勝静は二条城に在京40藩の重役を呼び、将軍の大政奉還について諮問し、翌日慶喜はこれを実行し、薩長討藩派の挙兵に対し先手をうっていた。27日には宗城に上京が命ぜられた。同日、中野七郎兵衛・居坂八十八の伺いにより、軍用ライフル銃火薬85貫目の製造のため銀札9貫目(光沢付日雇200人役の賃金不足分)が渡された。しかし、製品は「薬力甚弱火薬出来、篤ト打試候所、堅メ之節水加減ニモ可有之ヤ、薬力弱、永々御困相成候テモ安心不致ニ付堅メ直シ(○下略)」のため、銀札3貫301匁6分(日雇96人役)、同658匁7分5厘(諸道具直諸買物直違)がさらに支出されている。宇和島藩はライフル銃を装備しながら、火薬に弱点を残していた。28日、西園寺雪江が兄源八郎、須藤但馬とともに上京することになった(11月3日出発)。都築壮蔵は中国筋(広島)へ行っている。29日、兵庫開港につき商舎建築について、「初発ヨリ開港向見聞商舎御用兼」、小川六兵衛が5カ月間派遣され、田手次郎太夫の配下で勤めることになった¹²⁾。

11月2日、「宇和島御用問屋」に兵庫御用達塩屋安兵衛が任命されたと、領内船持中に伝達され¹³⁾ 兵庫貿易の体制が整った。10日には開産方が蒸気船方へ付属となった。12日、船手改革に伴い、柳沢三郎兵衛は「御船頭始御船手組蒸気船々將支配」、船大工町・郡奉行支配を命ぜられ、蒸気船方は水師場と改称され、頭取は伊能下野、井関斎右衛門・田手次郎太夫も関係した¹⁴⁾ 外国貿易は藩に出願するよう、郡奉行・町奉行に伝達されている。同日、中野七郎兵衛・居坂八十八の伺いにより、従来威遠流が使用した諸品・諸金の決算は精薬所で決算してきたが、「近来製薬精製之上多分ニ相成、其上近々御兵具方ヨリ合薬竝硝硫灰三味不殘被相廻候ニ付、此上多端手届兼」、古金類も大砲局で決算することになった。また、近日中宗城上京の供として、大西登ら78人・馬8疋が発令された。18日、相原主税ら30人が水師場出勤を命ぜられ、田手次郎太夫の差図を受けることになった¹⁵⁾ 22日、国友権四郎から大砲玉の鑄造が、これまでの見積より安価にできると上申され、両砲台の弾丸も含め、鍋鉄500貫余で鑄立て、経費は銀札28貫527匁2分とされている¹⁶⁾ 同日、宇和島市中16軒の鍛冶職がすべて樺崎役を命ぜられた。

12月2日、上甲貞一が長年の京都諸方を免ぜられている¹⁷⁾ 同年秋からは、諸士・足輕に尾装銃が渡されることになり、翌4年からは稽古用上製火薬5貫目が支給されることになった。藩は軍事費の増加に対応するため、庄屋豪農に治安講に加入するよう勧誘していたが、この日褒賞規程が定められている¹⁸⁾ 同日、外海浦庄屋二宮市右衛門(如水の子信治)弟又兵衛(篤四郎)が長崎で不慮の横死をし、「売事取引太造之始末方ニテ」(富有丸購入等の件)、市右衛門・親類が相談の上、高百貫の無尽を發起し、当面を凌ごうとした。しかし、一方では治安講に加入している者が、「其身不心得ニテ一家滅亡ニ及ヒ候者ハ御頓著無之」、「無拠次第ニテ及困究候者ハ、右講銀貨殖ノ内ヲ以御救被成下候様、兼テ御沙汰有之」、事件は又兵衛の一存で発生し、市右衛門の関知しないこととして、治安講は開始したばかりで貨殖にもなっていないから、加入した治安講を一口遠慮させる措置がとられている。しかし、富有丸が又兵衛名儀で藩に購入され

たかどうかは未詳である。

12月12日、蒸気船乗船を命ぜられていた前原喜市・中平真助が水師場出勤を命ぜられた。¹⁹⁾ この頃、入江左吉・森猪之助は、大砲局に集中した銅・錫・古鉄類で、軍用大銃弾丸を始め付属品を多く製造している。原田玄太らは小銃玉製造に出精している。

12月16日、長州藩主毛利敬親の宗城・宗徳宛書翰が使者によってもたらされた。²⁰⁾ 藩長討幕派は開戦の準備を進めていた。敬親は「淡路名代毛利平六郎、吉川監物名代宮庄主水并家老毛利内匠、芸藩一同登坂為致候」、「従来幕府向之御所置、士民一統不堪疑惑候得共」として、長州軍の大坂進発を通告している。宇和島藩はその進退を問われていることになる。17日、都築莊蔵は京都詰を解任された。²¹⁾ 在京中、「諸藩士交接多人数ト相成、并諸色高直、彼是失費、手元莫太ノ借財相嵩」み、「手当渡過金」16両3分2朱の免除を願い出たが、10年賦償還となっている。

同月19日、宗城の上洛出発に際し、旗本頭・大頭・目付等に、「朝政復古之大事件」のため上京するが、「御用途御手当無之」として、家中に自主的な用立金を命ずるとともに厳略を命じている。²²⁾ 22日、市中町人佐野徳治ら178人から総計銀札492貫が献金されている。この外、庄屋役等の献金も莫大である。蒸気船購入のための献金もあった。29日、金子拙蔵が洋学所へ出席しているが、これは三瀬周三の英蘭学稽古所の後身であろう。30日、朝廷より慶喜の大政返上、将軍職辞退の両条について通達があり、²³⁾ 新政府の樹立が伝達された。

慶応2年9月15日、一橋慶喜の要望による「諸藩衆議」

四侯会議の失敗

のため、宗城に上京が命ぜられ、目見以上の藩士に伝達された。²⁴⁾ 9月7日、京都で議奏飛鳥井雅典まさのりから京都留守居役岡田八郎兵衛（宗城付き、目付、慶応2年7月京都詰御免）に勅書が渡され、木原半兵衛（宗城付き、慶応元年11月元締役、旅勤）が宇和島に早追で知らせたものである。²⁵⁾ 同月20日、熊本藩家老長岡良之助が来藩したのは、大坂から帰藩の途中宗城・宗徳に対面し、旧公武合体派の盟友として、政治情勢に関する情報交換のためであ

ろう²⁶⁾ 宗城上京の供も決定され、10月には西園寺雪江・上田貞一（上京中目付助）が先発した。西園寺の任務は京都情勢を探索し、近衛公の書翰を宇和島に持ち帰ることにあった。しかし、同年9月7日付宗城宛慶永書翰にあるように²⁷⁾、慶永（幕府では老中板倉勝静・勝海舟、大目付川勝広運・外国奉行永井尚志が支持）は慶喜（会津・桑名藩が支持）と兵庫開港、征長軍の解兵についての意見が対立した。慶永は朝廷内では朝彦親王、外様大名では宗城・久光・容堂・長岡良之助らの旧公武合体派に上京を求めた。しかし、すでに薩摩藩は討幕に傾き、また慶喜との間には大きな見解の相異があった。

10月15日、宗城は所労と称して上京の猶予を願い、家老志賀頼母を出発させた。11月5日、伝奏衆から重ねて上京を命ぜられたが、疝積と称して動かなかった²⁸⁾。続いて孝明天皇の死があった。翌年2月9日、「国喪ニ付一同解兵」の通達が届いた。

翌慶応3年2月23日午後、島津久光の使者として、西郷吉之助が蒸気船三邦丸で樺崎台場沖に着船した²⁹⁾。西郷は上陸して町会所に案内され、翌24日夕方、吉井幸輔とともに宗城に謁見した。『在京日記』の「大隅守口上大意」によると、「宇内之形勢真ニ切迫」として宗城に上京を促した。宗城はこれに同意し、「当今救時之大策着眼ハ更ニ無之候得共、兼々御同盟之事故可致上京」、久光上坂の後、その蒸気船の借用を求めた。西郷は長州処分と兵庫開港問題について、薩摩・越前・宇和島の四侯会議の開催の藩論を持ち、土佐へ行って容堂の賛同を得、宇和島に回航したものである。上記の宗城の回答を見ても、積極的な賛成とは思えぬが、宗城は西郷に上京の利得があるかと問い、松根図書は藩財政の窮乏を告げたため失望した。会談後の宴会で、宗城が「吉之助、其方は京都に女があるか」と問い、西郷を軽視する発言をした³⁰⁾。宗城はすでに、薩長討幕派の動向は知っていたであろうし、久光との提携は別として、西郷・大久保との間には妥協の余地はなかったのであろう。24日夜、西郷・吉井は出航した。

2月19日付の老中板倉勝静の封書が届き、慶喜は兵庫開港を決断し、3月20日までに書面で回答することを求めた。これは仏公使ロッシュの献言を採用し、

薩長・イギリスに対抗するため、兵庫・大坂の開港・開市を専決し、2月24日に尾張・薩越土宇ら9藩にこれを諮問して上京を命じたものである。朝廷は開港に反対し、慶喜は朝議を無視して開市・開港を強行しようとした。大坂からの3月19日付松根内蔵書翰によると、久光は下旬から4月2日には着坂、容堂にもこのことは知らされ、宇和島には同月6、7日頃に蒸気船派遣と通知され、4月6日18時に宗城上京の迎えとして三邦丸（船将有川矢九郎）が住吉港（樺崎）に投錨した。帰国した内蔵はさらに詳細な情報をもたらした。その伝奏衆の書翰に、慶喜の開港建言を「不容易重大之議」として、宗城の上京を求めている。また、3月22日付の慶喜の建言写も届き、慶喜の強硬論の内容も分かっていた。

3月30日、宗城は上京を決定し、京都詰水野八左衛門に伝えられた。4月10日6時3分、三邦丸は出航、12日4時大坂川口に着船した。翌日、宗城は英通訳官アーネスト・サトウ（薩道）に会った。15日4時着京、薩摩使者大久保一蔵が来て、兵庫開港は会議の上で結論を出す、慶喜が開港を専決したのは四藩上京の対策で、会議で決定したのでは、幕権にかかわるからだと言った。宗城は真相はサトウから聞いていた。17日、小松帯刀が来た。宗城は「当節ハ早ク片付帰度旨申候処」、帯刀は兵庫開港になっても11月までは在京して欲しいと言う。宗城は「迎モ金力疲労難堪、夏九十日丈如何」と言い、早くも帰国の意志を明らかにしている。

同17日、伝奏野官定功らが依願退職した。これはパークスの越前敦賀、サトウの東海道旅行問題³¹⁾が「朝廷ヲ輕蔑せる次第」、「野宮始四人之卿にて募意を奉シ随従故」というように、外交問題が内政に直結していた。また、会津藩士秋月悌次郎から、会津藩と薩摩の対立について聞いている。20日、板倉勝静と懇談し、「兵庫開港長州処分」について、各自が協議し腹藏なく発言せよといわれている。21日、都築莊蔵（末広唯之助弟、都築織衛の養子、慶応2年8月以来、探索のため旅勤多し。儒者）がパークスの旅行が加賀藩領海津で差し留めとなり、「大不平」と伝えている。

26日、宗城は久光に自書を送った。そのなかで、兵庫問題は容堂上京の後に決定としつつも、「予メ互ニ申談置度、隅州（○久光）ハ勿論、小松（○帯刀）始内外之事情洞察熟知故、救時之大策要領を教示有之度事」としている。土佐藩主山内豊範の名代豊積（兵之助、豊信の弟）は25日に着坂、容堂は29日に着いている。28日、参内した宗城は松平春嶽と兵庫問題について話している。

30日、坪平信良（慶喜の侍医、幕府奥医師）が来て、慶喜の人物評をし、「樹公英明、在側之人才無之故、一二層も公ヨリ才徳マサリ候人物を御撰擢御信任無之而ハ、事業難被進云々」と慶喜を説得したという。28日に慶喜は將軍の専決事項として、条約履行を宣言しており、この秘密が宗城に洩れているのである。朝命に違反して下坂しようとする慶喜に対し、信良は説得を試みた。³²⁾

5月2日、容堂邸へ春嶽・宗城も集会し、「四年振知己寄合大愉快存候」と言い、久光との間には距離を置きつつ、三者は意気投合している。翌日、宗城は朝廷内で、中山忠能（議奏、討幕派に協力）^{ただやす}・中御門経之（参議、岩倉具視・正親町三条実愛・大久保らと王政復古・討幕を進める）らが役職に就き、久我素堂公（建通の号、準関白と称され、攘夷派からは四奸の一人とされた）^{たけみち}も復活する可能性のあることを聞き、「亦一騒動相起可申」との懸念を聞いている。4日、春嶽邸で久光も加え「四隠会談」、次の諸点で意見を一致させた。(1)幼帝補佐のための議奏の選任。その候補は正親町三条大納言（嵯峨実愛、10月討幕の密勅を大久保・広沢兵助に授けた）・徳大寺大納言^{さねつね}（実則、尊攘派堂上の1人）・醍醐大納言^{ただおき}（忠則）。この人事は久光の老えが強く出ている。(2)近日登營して、慶喜が兵庫問題の経過を詳しく聞く。議奏の選任については曲折があった。

5月7日、吉井幸輔（友実）・西郷が宗城の許に来た。前日の四侯会議における兵庫問題・議奏選任についての確認であったが、伝奏には万里小路博房・烏丸光徳^{みつえ}という尊攘派公卿の名があった。この頃、宗城の側近として周旋活動をしているのは、西園寺雪江と上甲貞一で、近衛家・一条家・九条家・柳原家、諸藩との接渉に当たっている。議奏も正親町三条、中御門経之・大原重徳らの尊攘派であり、これは西郷・大久保の画策で、慶喜に対抗するためであった。

10日、薩摩藩邸で久光・春嶽・宗城（容堂は病氣不参）の3人が談合した。久光は「兵庫一件ト長防御処置一件」のどちらを先にするかと問い、宗城は長防一件が先、兵庫問題が後と答えている。久光も「僕見込ミモ符号致候」と賛同し、長州藩が芸州藩を介して歎願書を出し、これによって決定することに慶永も賛成した。

5月14日、4人は登営して慶喜に会った。すでに、慶喜は英仏蘭米代表に兵庫開港を約束していた訳だが、慶喜はその決定の正統性を強調し、「最早来月ハ布告（○朝廷が）ニ不相成候而ハ差支候故早々可致」と述べた。久光・宗城・容堂はそれぞれの立場から、「開港御決定御坐候而ハ必混乱相生」と反論し、長州問題についても、慶喜は確答を避け、久光は「先長後兵」と認識したのみで、慶喜は曖昧な姿勢を通し、結果は参預会議の時と同じであった。17日、土佐邸で「四人参会」、開港問題については強く慶喜に対する不信感を示し、長州問題は征討を中止して、長州藩が提出した歎願書によって、朝命として「大膳父子官位被相復、入京共其他総而如是迄被仰出度」とまとめ、老中小笠原長行の解任を求めた。19日にも久光・春嶽・宗城は慶喜に拝謁し、長州処分と兵庫開港について持論を述べ、慶喜の意見とは合致しなかった。将軍・閣老、春嶽・久光・宗城（容堂と意見一致）の三者間でも所見に相違があった。「先長後兵」の問題だけでなく、長州処置についても一致しなかった。

21日、容堂を除く3人は老中板倉勝静・稲葉正邦に会い、「第一長防、第二開港相成、長寛大之御処置ニ可相成儀、朝廷へ被仰立候事」とし、開港は朝権によるよう陳述し、両閣老は同意した。しかし、老中小笠原長行は長防処置に不適だから解任せよといった。この日、土佐藩板垣退助・中岡慎太郎らと薩摩藩西郷・小松らは京都で討幕を密約していた。この情報は小松方へ行った西園寺雪江もつかんでいない。22日、早くも容堂が正親町三条家に暇乞いの使者を遣っている。名代として豊積を在京させるというのである。

23日、小松・大久保が宗城を訪問し、久光の建言草稿を持参した。宗城は補筆し、2人に春嶽方に回させ、春嶽から板倉に提出させることにした。この建

言は四侯会議の実現以来の討議をまとめ、4人の連名で「幕府年来之御失躰」を挙げ、特に「防長再討之御一挙より物議沸騰、天下離反之姿ニ相及候次第」とし、「防長御処置可為緩急、自分[◎]兵庫開港防長事件は大ニ寛急先後之順序有之段、談合之上屢建言（○下略）」してきたが、重ねて反省を求めるというものであった。同日夜、宗城は徹夜の覚悟で参内、翌24日にかけて「防長ト開港二件御評議」という事態になった。宗城は「大樹公今日之挙動、実ニ朝廷ヲ輕蔑之甚敷、絶言語候」と記している。將軍は四侯会議の結論を納得せず、薩長上三藩の討幕派は団結を強めている情勢のなかで、旧公武合体大名の政治的発言力は低下していた。四侯会議は破綻し、容堂について宗城も帰国を決意するに至る。慶喜の策謀が四侯を圧倒した³³⁾

雄藩大名の動向

5月26日、芸州藩家老石井修理が宗城を訪問し、長州処分について幕府の命令は寛大というが、その実行性について四藩に仲介を依頼したが宗城は拒否した。一方、幕府の態度も不快として、四藩連署を朝廷に提出した。5月24日の兵庫開港勅許(24日、慶喜は勅許を得た)に関する宗城の手記には³⁴⁾ 勅許に至る朝廷における摂政二条齐敬・朝彦親王、四侯、慶喜の討論の内容が詳しい。薩摩は武力討幕へと動いて行き、慶喜は軍事力を強化し、他の雄藩大名は政局の動向を静観する以外になかった。宗城・容堂は「大膳父子（○毛利敬親父子）官位復旧、尤長門へ家督等之事ハ無御沙汰方可然」と言い、薩長討幕派の勢力伸長についての認識が不足している。他の大名たちが時局判断に当惑するのは当然であろう。慶永も永井尚志に、芸州藩を通じて長州藩を服罪させることは「其儀ハ難出来」、また逆に長州藩が「種々幕府之罪ヲ挙ハ不致哉」と答えている。長州藩のみでなく、「天下人心離叛不服」、「幕府ニ而公明大反正」の必要があると説いている。四侯会議失敗後も、慶永を中心に芸州藩石井修理を加えて幕長間の調停がなされるが、「結局不決、嗚呼之四字ニ付し申候」という結果になり、6月に入り慶永も帰国を決意するようになる。容堂は6月2日土佐に帰り、春嶽は8月6日退京、久光は同月15日、宗城は18日に退京した。

この間、宗城は6月3日、幕府軍の進発は条理がなく、一方薩摩に討幕の意志があるかどうか密話したが、柳原光愛・綾小路権大納言・久光との会合で「其儀ハ御心配不被為在間敷、離間説」と述べている。

6月5日、芸州藩世子浅野茂勲が上京、家老石井修理が老中板倉勝静に提出する書面案を持って宗城の意見を求め、山内豊積も来た。この時点でも、朝廷では四藩伺書が課題として取り上げられている。この日、「新選組頭分兩人」が昨日拝謁を申し入れたといい、会津・紀州・彦根諸藩の動向も問題になってきた³⁵⁾ 6月11日、春嶽邸で宗城・久光が会合し、四藩建言も結着せず、3人は集会を重ねても成果はなく、帰国の意志を示した。この日の中根雪江と若年寄永井尚志の討談でも幕府と3人の疎隔は明らかとなった。宇和島藩士では松根内蔵・西園寺雪江・須藤但馬・清水飛弾らが公武間の情報収集に当たっている。鍋島閑叟も近々上京とされている。宗城にはいまだ薩土討幕派の動向も、後藤象二郎の大政奉還論も捉えられていない。土佐藩士後藤・福岡藤次^{たかちか}(孝悌)や田中幸助(中井弘)らの接触は内蔵がとらえていた。

6月17日、後藤象二郎が来て、「当時見込居候兵庫開港、長防御所置、五卿帰洛等ハ枝葉にテ、夫より被対西洋各国耻敷無之様〔朱書象唱政事堂〕皇国之国体大御変革相成度」と述べ、大政奉還論と代議政体論を展開したのに対し、宗城は「今にてハ早くハ無之哉」と時機尚早論を述べ、しかも「薩小松西郷へも及内話候様」と言っている。この日、熊本藩主細川護久も来邸している。20日、大久保一蔵・町田民部が来邸、町田(久成、大目付)は「西洋談」(英国留学)をし、「且皇国大変革之密話」をした。後藤の公議政体論は坂本竜馬の「船中八策」に基づき、その大政奉還論をもって政局をリードしようとした。この案は中央集権体制の構想であり、後藤は在京の土佐藩重役の同意を得ていた。6月22日、坂本・中岡も陪席して、薩摩側は小松・西郷・大久保・吉井、土佐側は後藤・毛利恭助・福岡が会同して、いわゆる薩土盟約を結んだ。この内容は前日に後藤から須藤・西園寺・上甲にも伝えられ、後藤は近日帰藩して容堂に献策するとした。22日、宗城は久光を尋ね、後藤の人物評・主張、近來の態度に

ついで意見を交換している。久光は「象次郎余り気張強過候、若しあの通之議論を吐置候而帰国候ハ、亦不出含^(ママ)かも不知ト存候よし」と述べ、宗城は「マサカ左様ても有之間敷候得共、同人儀昨年より出崎、富国之策粉骨申候処、国元にてハ不評判、(○中略)此度意表之発論に而、藩士之其身を悪ミ居候意氣を变シ可申密策かと邪察申候処」、久光は「至極の処へ考カ付候、何分丸テ難信様子、此方(○宗城)も粗同様也」、2人は容堂も象二郎の政体構想を承知しないだろうと意見が一致した。

6月24日、土佐藩士由井猪内(慶応元年開成館軍艦局頭取として後藤を補佐)が来て、容堂の伝言を伝えた。この時、宗城は「当分此方より申述候処ニ動ハ不申旨」由井に言った。由井は「象次郎議論被行候ハ、是非御人数交代も仕候故、御帰り仕度旨」述べたが、宗城は「其時にて可然と考」え黙居した。また、宗城は「弥象次郎主張スル論モ人望ニ関係と察申候」と記していて、大政奉還論の浮上は感じている。しかし、26日、久光は宗城に「此頃象次郎如立論処置ハ甚不宜と独見ニハ存候」と、反対論に傾いている。同日、小松帯刀は宗城に、大政奉還論に同意とし、「尤弥平穩公正ヲ主張ニナクテハナラス」と付け加えている。27日、宗城は浅野長勲・家老辻将曹に会い、芸州藩は後藤の議論支持を知った。この日、尾張藩付家老成瀬隼人正が上京している。

28日、宗城は土佐藩邸から後藤の「主旨書」を「薩にても無異存よし」として借用して帰った。この時、由井が会津藩若年寄手代木勝任^{てしろぎかつとう}(容保の京都守護職時代、公用人として渉外活動し新撰組・所司代を指揮)らは紀州藩主徳川茂承^{もちつぐ}を將軍に擁立する構想もあり、これは四藩の主張のように、慶喜では毛利家処置が全体藩の考えるようにならないからだと言った。「主旨書」(旨主)³⁶⁾には、(1)国体の協正と「万世万国ニ互^(ママ)テ不耻、是第一義」。(2)「王制復古ハ論ナシ」。(3)「国ニ二帝無シ、家ニ二主無シ」、政刑を一君に帰する。(4)「将職ニ居テ政柄ヲ執ル、是天地間アルヘカラサルノ理ナリ」、將軍を諸侯に帰し「翼戴ヲ主トスヘシ」、以上4項が記されている。最後に大政奉還の上、制度を一新して政權を朝廷に帰し、「諸侯会議、人民共和、然後庶幾以テ古国ニ臨ンテ不耻」国体の特

立すると言う。具体的には議事院の建立と諸藩からの入費の貢献、議事院は上下に分け、議事官は「上公卿ヨリ下陪臣庶民ニ至ルマテ、正義純粹ノ者ヲ選挙シ」、諸侯も上院に充てる。外国との条約は兵庫港で「朝廷ノ大臣諸侯ノ士大夫ト衆合シ」、新条約を結ぶとしている。

大政奉還

土佐藩の大政奉還論は以上の通りである。6月29日、田中幸介(中井弘)が宗城の許に来て、薩摩の五代才助が交易を「余リ手ヲヒロケ、不都合ナカラ今退崎スレハ尚洋人へも薩藩而失面目」という状況があつて交易を手控えしているが、後藤も同様に五代のまねをして交易を拡大して後悔している。「土藩暴論徒、象次郎^(ママ)ヲ惡事甚敷由」のため、大政奉還論で人気取りをしているのではないかと宗城が言うと、田中も左様と言った。7月1日、後藤は3日に離京するが、この日宗城邸に来た。土佐藩で「粉骨之心得ト申候故、否遅々スルト此方(○宗城)ハ帰ル由」言い、「薩之西郷ハ目下戦候意氣有之、象より重々止メ置候得共、此方よりも出候ハ、重々戒メクレ候様」と、後藤は宗城に討幕派拳兵を制止するよう依頼している。同日、芸州藩家老辻将曹(第二次幕長戦争では寛典論を説き、慶応3年秋には薩長芸三藩同盟を締結)が来て、同藩は土佐藩論に賛同するが、「夫故彼藩父子計建白ハ相控、追而一同申上候而ハ如何」と言い、宗城もこれに賛同している。また、5月20日頃、備前藩(藩主池田茂政、斉昭子)家老が来て、慶喜に「是迄も不外御間柄ニ付、種々御諫言モ被申上候処、更ニ御採用無之、方今は致方も無之」、沈黙していると言った。芸州藩は防長の件で建白し、「其名分条理ヲ委曲申出度との赴^{マツ}」とも述べている。25、6日頃、祇園二軒茶屋に「因(○鳥取藩主は池田慶徳、斉昭子、反尊攘派)備阿(阿波藩主は蜂須賀斉裕、家斉子、公武合体派)参会」、辻将曹を招いてその主意を聞きたいという情報があつた。「薩へ懇意之芸藩ト参会」というので警戒されたが、将曹は「小松大久保西郷等懇意かと」尋ねられ「不知」と答えたという。2日、宗城は西園寺雪江に久光と連名の書面を容堂に持たせることにし、3日には上甲貞一を土佐を経て宇和島に派遣することにした。

7月4日、由井猪内が西園寺を訪ね、前夜の永井尚志と後藤の対談の内容を

伝えた。「象云、小条理を不論、一和シテ立国之基本、万国へ対不耻ト申様相成度、此上ハ何分主人へ未タ不申候故、御断申上候」と永井に答え、「当時合戦争云々等以之外之儀」と討幕論は否定している。8日、春嶽が来訪して、西周助（周、蕃書調所教授。文久2年オランダ留学、慶応元年末帰国、慶喜の側近として「議題草案」=日本憲法案を立案）が留学中、「万国通法和解いたし呈幕、即皇国立国之論、議事院等之建白、幕採用ニモ可相成模様候処、亦不被行」と、慶喜側の公議政体論の研究を知らせている³⁷⁾。12日、宗城は春嶽と密話し、「老公（○前尾張藩主徳川慶勝）之主意ハ、今日ニ至幕府之威力ヲ以御処置有之候而ハ不宜、為天下ハ如何様辛苦艱難モ被相忍而、立国之基本可被相定」と、尾張藩も幕府の軍事力の行使に反対している。しかし、会津藩は四藩建言に対抗して「建言有之ハ以の外」と反対したという。この日、藩では新撰組が西園寺雪江・小島備中を暗殺するという風聞があり、転居させている。また、先日の因備阿芸参会についても、慶喜は「決而四藩ト申合候芸論ニ同意致間敷」と鳥取藩・備前藩に警告している。備前藩は、8月に入り家老日置帯刀・牧野権六郎の連名で、閣老に幕府専制の廃止、朝意尊重、皇国一体の強兵を建議している。16日、宗城は春嶽と密話、春嶽は「追々疲弊甚敷、全体六月迄の見込ニ而出京、月々万金ヲ費シ、其上今日更ニ周施^マ尽力モ不出来候故」と莫大な滞京費、四侯会議の路線の先細りのため、国許からいったん帰国せよとやってきたといった。慶喜は春嶽に、「是迄之様御懇話モ無之、親藩トモ不思召趣ハ被察」という姿勢を見せ、春嶽も帰国を決意した。後藤の大政奉還論について、春嶽は「後藤より及吐露候儀申上候^マ欤モ不料、亦其時御申合可致立論大議ハ、尤同意不動候得共、事实ニ施行時機ニ至テハ^マ逆力^マ尽、凡庸小子忤不及簡見不能思量」と述べ、容堂の上京・周旋を期待している。

7月18日、結城筑後守（秀伴・快堂、曇華院家司、宇治に居住）が宗城を訪ね、日向高鍋藩士何莠^マの話として、「幕着眼ハ当時仏国（○米国カ）の注文之軍艦（ストーン・ウォール号カ）等参候ハ、追々是迄幕へ不服之諸藩、以兵威圧伏為致可申、其末ハ乍恐 天朝之处も如何と奉存候」と、老中小笠原長行が

藩主秋月種殷^{たねとみ}に話したと伝えている。慶喜の決断の一端がうかがわれよう。翌19日、都築莊蔵が大坂へ行き、アーネスト・サトウへの「口上覚書」を渡すことになった。サトウは28日に北陸旅行から大坂寺町の本覚寺に帰っている。若松幹一郎の情報は都築を経て宗城に渡り、イカルス号事件あるいは英仏公使と慶喜の関係についての情報を求めたのであろう。西郷は27日にサトウを訪ね、兵庫貿易への幕府の介入を批判している。³⁸⁾

7月20日、宗城は春嶽を訪ね、久光の使者小松帯刀の意を受けて、帰国の延期を勧告している。このころ、すでに大久保・西郷・岩倉らは王政復古を計画していた。宗城は「此方よりも力尽、疲弊更ニ無致方段ハ御同様にて、一日も無益故、御暇願度候得共、防長之儀モ未タ不相分、且兄今御帰国候ハ、四藩ト申スモ跡^脱ハ薩ニ微々たる一小宇藩故、自ラ勢ヒ無之、孤立之姿」になると訴えている。この日、福岡藤次が来て、14日に評議が決着したと伝えた。後藤は容堂に献策して大政奉還の裁断を得、寺村左膳は藩主豊範の了解を求め、板垣の武力討幕論を抑えて建白論を藩論とし、後藤・寺村・真辺栄三郎が容堂から建白準備を委任されたが、イカルス号事件の容疑のため英公使パークスが来航し、9月初旬まで時間を空費することになった。

7月24日、安芸藩士小林柔吉（降麟，征長に反対）の話に、「幕府海陸軍一万計上京ニ而、四藩を圧伏サセ、是非々々猛威ニ而帰国為致、若シ不肯候ハ、打滅^滅之勢ヲ被張候趣、長防御処置も依然タル不条理を以可被施由、失スル時ハ人ヲ制スルニ而、只今事ヲ起可申忤暴論申候故」、福岡藤治が鎮撫したという。宗城は幕府が武威をもって制圧しようとする場合は「恭順可相竭、将曹忤論言語道断也」と答えている。この日、小松の代りに大久保が来た。大久保は辻将曹の話は初めて聞いたと言い、軽率な発言は慎しむよう小松から教えてくれと宗城は答えた。しかし、「幕処置ハ油断不相成候故」、情報は交換することにした。小林の話の根拠は不詳である。

7月26日、林基吉郎が結城筑後守方へ派遣された。高鍋藩士坂田莠らの話を確認するためである。幕府の陸海軍の増強、雄藩大名を圧倒の件は確証はない

と結城は言ったが、「幕猛威ヲ更張スル之密策也」とされている。一方、宗城は久光宛に書翰を送り、老中板倉勝静に長州処置について、「翌廿四日暁ニハ芸へ云々達有之、虚欺言語道断ト申遣候処、返事ニ実以愚弄之極、天下之閣老として虚言ヲ吐候儀、罪科深重、可憎々々と也」と、宗城も久光同様に幕府を批判している。この日辻将曹も来て、板倉から毛利家への書付を渡されたが、「幕にてハ当時弊藩よりハ御取次御断申上候、天朝且諸藩始、幕府にて御因循と奉存候、(○中略)御四藩様よりも上坂可然と被仰下候ハ、大ニ力ヲ得、疑念も薄く可相成と奉存候」と述べた。宗城はこれを拒否している。また、都築壮蔵からの見聞書も届き、松根内蔵がパークスへの見舞いとして下坂している。27日、「阪下駿馬^{◎坂本}_{竜馬}が参、藤治同伴也、長談スル」とある。竜馬だとすれば、宗城はその持論を直接聴取したことになる。28日、上甲貞一も20日に上京、さらに「此度之儀至重至大ニ付」、内密に松根図書も上京するとあり、大坂の内蔵・壮蔵からも連絡があった。外交問題と在坂中の慶喜の動向についてであろう。イカルス号水兵殺害事件と土佐藩との交渉については、林基吉郎も福岡藤次から詳細を聞き、宗城も後藤の上洛遅延の理由を理解した。8月3日、内蔵・壮蔵が大坂から帰り、さらに詳報を伝えた。この日、宗城は越前邸に行き、「從來人合兄弟ニ候処、(○中略)弥以懇交之情後世迄互ニ残度候故、爾後兩敬可申合事」と交情の強化を求めている。

8月5日、中根雪江が来て、政局について「公平ニ諸侯ト万機ヲ議スルコトニ無之而者、不治事ハ御熟知(○慶喜が)ナカラ、何分幕習甚敷故、御口外モ六ヶ敷と存上候由」と述べ、慶喜と京都守護職・所司代の連携の強化を指摘し、「人冠(○会津)ハ一ヶ年持高外幕より三十六万金程候由」と言う。6日、大久保が来訪し、4日に伝奏日野家から越前・薩摩両藩留守居役に渡された両事件(防長問題・開港問題)について、將軍ならびに春嶽・宗城にも「寛開帰着者同様ニ付御取捨之上被 仰出候」と伝えよということであった。大久保は久光・宗城兩人で伝奏に伺書を提出するとした。その内容は、兵庫開港の勅許という事態に立って、(1)防長問題は毛利敬親父子の官位復旧によって、幕府の反

省の事実が明白である、(2)兵庫開港は「順序遅速之異同者瞭然相分れ候儀」とし、止むを得ず勅許という点は「公裁之御旨趣一円安堵難仕、当惑之至」、「朝議之枢機筋違江可承合道理無御座」として、書付の趣旨を請けることはできないとしている。薩土両藩は兵庫開港に内実は賛成なのだが、慶喜の強要によって勅許に至ったことに反撥しているのである。宗城は帰国を決意しながら、土佐藩の動きを待った。7日、安代鶴夫、ついで8日、松根図書が着京し、9日、宗城は帰省願を出すことを藩士に伝え、安芸藩の蒸気船を借用することにした。帰国の理由は春山の病気である。

8月11日、宗城は暇願いのため、老中板倉勝静を訪れたが、板倉は「今御帰省にてハ甚心細との一言出」、「薩州等ハ迎モあなたでなければおさへハ不出来、御帰省にてハ跡甚以不安心」と述べていて、宗城は薩摩・幕府の両極から楯にされる存在であった。この時「品砲台」の御免、イカルス号事件の話をしている。桜田門の変以来の宗城・図書の「因循論」は、薩摩藩内では一般的であった。12日、柳原前光^{さきみつ}と宗城の次女初との縁談が、高崎左京帯刀を介して進められていたが、来年3月頃結婚の運びとされている。この日、大久保一蔵が来て、久光も脚氣療養のため下坂すると伝えている。17日、福岡・高崎が来て、福岡がイカルス号事件についてのサトウと容堂の応接の模様を話している。18日、宗城は離京して大坂藩邸に着き、21日、安芸藩蒸気船豊安丸(長さ30間、幅3間、126馬力)で夜9時に出航し、23日11時に樺崎港に帰着した。

9月10日、西園寺雪江は実兄源八郎を同道して土佐に出発した³⁹⁾10月朔日に帰国しているが、宗城と容堂の発言は記録にない。

9月9日、後藤象二郎は上京の上、西郷に大政奉還建白の提出のため、討幕挙兵の延期を求めたが、薩摩藩側はこれを拒否した。18日には大久保が毛利敬親父子と会談し、討幕挙兵の盟約を結び、薩土盟約は無視された。

10月3日、日和見を続けている芸州藩も土佐藩に同調し、後藤・福岡は老中板倉勝静に容堂の建白書を提出、翌4日、寺村左膳・^{こうやま}神山左多衛がその写しを関白二条斉敬に持参した。「唯願クハ大活眼大英断ヲ以、天下万民ト共ニ一心協

力、公明正大之道理ニ帰シ、万世ニ互^(ママ)リテ不耻、万国ニ臨テ不愧ノ大根抵ヲ建テサルヘカラス」と、朝廷・幕府・公卿・諸侯の意見を統一し、「国体ヲ一変シ、至誠ヲ以テ万国ニ接シ」、王政復古を実現したいというのである⁴⁰⁾ これは四侯会議の思想の根本を再現するものであった。具体的には、前述の「主旨書」を敷衍したものである。(1)天下の大政全権は朝廷にある。(2)その議政所は京にあって上下に分け、議事官は上は公卿、下は陪臣・庶民からも選挙する。(3)庠序学校を都会に設置する。(4)外国とは兵庫港で新条約を締結する。(5)海陸軍備を「一大至要」とし、軍局を設け朝廷の親兵とし、「世界ニ比類ナキ兵隊」をつくる。(6)古来の旧弊の改新、(7)朝廷の制度・法律は、律令の弊風を除いて一新し、「地球上ニ独立スルノ国本」を建てる。(8)議事の士大夫は公平・正直を旨とする。この別紙には、寺村・後藤・福岡の連名がある。

10月6日、大久保は長州藩品川弥次郎、岩倉具視・中御門経之と会して王政復古を協議し、13日、岩倉は薩摩藩主父子（久光・忠義）宛の討幕の密勅を大久保に与え、長州藩主父子の官位復旧の宣旨を広沢真臣に渡した。

この13日、將軍慶喜は在京40藩の重臣を集め、大政奉還を諮問した。とくに所存のある者は將軍謁見も許されるというので、薩摩藩の小松帯刀、芸州藩の辻将曹、土佐藩の後藤・福岡、備前藩の牧野権六郎、宇和島藩の都築壮蔵（留守居代、留守居は林基吉郎）が謁見を願い出た、この内、薩土芸三藩は同時に謁見した。壯蔵は最後に謁見した⁴¹⁾ 「先日土州より建白仕候書面孰覽仕候処、一々尤之義ニ御座候。何卒右建白速ニ御裁断被為在、公卿・諸侯・御同心御会議、光明正大之御処置ニ被為運、万古不可拔之御国体、御確立被為在候様奉存候。右思召列藩奉敬候而者、御高德ニ相化、憤発興起、為神州尽力可仕と奉存候。且又大屋形様御名^{○伊達宗城}儀、当四月中より上京、一二建言之次第茂有之、御名儀ニ於而モ、御政令一途ニ被為出、御政柄朝廷ニ而御握、諸侯同心尽力之義者、兼而之存念と伝承仕居候。猶火急罷下り思召申聞候得者、此節之儀ニ付、存慮も御座候ハ、委細言上可江と奉存候と申上候処、成程と御意。右畢而御意ニ、別段心付も有之候ハ、言上可致旨。其余奉言上候条件無御座旨申上退

出」とある。つまり、莊蔵は宇土盟約に基づく土佐藩主導の大政奉還論について宗城の指示を受け、それを忠実に表明している。

退出後、莊蔵は小松帯刀に会い、帯刀言上の趣意を問い、自分の言上の内容を話した。帯刀は「御尤之御儀、於某等茂、貴所御同様申上候、其内是迄も毎事御因循、此機会を不失、決を今日ニ取、速ニ御奏問可相成旨、閣老を以伺取之志ニ御座候間」と、慶喜の迅速な大政奉還を期待し、莊蔵に事態が判明するまでは帰郷しないよう忠告している。宗城・宗徳への封書も渡され、国許に送り、宗城に早々上京するよう老中板倉勝静から指示があった。

10月14日、慶喜は薩摩藩の一部を含む雄藩大名の意見を踏まえ、討幕勢力の伸長、日和見的諸侯の動向も考慮して大政奉還を建白した。当然、徳川宗家は圧倒的に大きな所領・軍事力を保持し続けながら、政権のみを返上し、再起をはかる方策を考えていた。これは参預会議解体以来、慶喜が追究し、また、旧公武合体派をその周縁に結集させようとしたものである。こうして、慶喜は参内し大政を返上、朝廷はこれを勅許した。

大政奉還の急報は、10月20日夜、大早で都築莊蔵が大坂留守居役水野八左衛門の添書と宗城・宗徳宛の板倉勝静の封書を持って帰国した。26日、宗城は志賀頼母に上京の供を命じ、27日に幕府の奏問書・宗城への朝命、その奉答書が目見以上の格式の者に示された。28日、西園寺雪江の実兄同伴の上京願いが許され、安芸藩の使者が来藩し、29日、兵庫開港に備えて、小川六兵衛を商舎設立の調査のために派遣し、田手次郎太夫の指示を受けさせた⁴²⁾ 兵庫御用達・宇和島御用問屋は塩屋安兵衛である。

10月22日、朝議により暫時慶喜に大政委任の沙汰があった。一方、討幕派公卿は21日、中山忠能・三条実愛・中御門経之が、討幕実行の沙汰書を薩長に伝え、大政奉還派に対抗する討幕派の態勢が確立することになる。11月13日、薩摩藩主島津忠義は率兵出発、18日に長州藩世子毛利定広と会見して出兵を協定し、23日に入京した。25日、長州藩家老毛利内匠の率いる藩兵が三田尻を出発、29日には西宮付近に上陸した。大政返上に反対の幕閣、親藩・譜代大名、とく

に会津・桑名両藩はこれに抵抗の姿勢を示した。

11月12日、容堂は宗城に書翰で23日に高知を出発することを知らせ、松根図書にも後藤から宗城の供をするよう連絡があった。京都には須藤但馬・西園寺が6日に出發し、22日に着京していた。しかし、宇和島藩の対応は遅く、12月17日、「過ル九日以来不容易變動相醸候事申来」というように、すでに7日に兵庫開港・大坂開市、9日には鹿児島・名古屋・福井・高知・広島藩兵が警固する宮廷では、王政復古派公卿を中心に王政復古が決定し、同日夜には小御所会議で、慶喜に辞官納地が命ぜられていた。

宗城は12月19日、安芸藩蒸気船豊安丸で宇和島を出港、23日に京都の旅館大雲院に着いた。宗城は伝奏衆から11月中にかならず上京せよと命ぜられていたに拘わらず、約1か月近く遅参したことになる⁴³⁾この間、宗城は木蠟専売制について指示、また、11月12日に大西登ら76人に供を命じている。15日、都築莊蔵が中国筋（広島）から帰着し、12月9日長州藩使者瀧弥太郎が来藩しているところを見ると、軍事力で弱体の宇和島藩は、避戦翼幕の姿勢をとったのであろう。この時も町人・農民から莫大な献金を得ている。また、12月12日、入江左吉・森猪之助が軍用大銃弾丸・付属品の製造で、原田玄太が小銃玉製造、安田甚内が軍用玉製造、武田賢次郎が生兵取立方、鬼生田内記・豊間是兵衛・大内源左衛門が小銃玉薬運送隊御用、豊間は別に軍用玉製造、堀池左太夫弟久三郎が同上、萩森厳助が「三瀬周三引籠中」英学教授で、松崎健次郎が兵学取立世話・書物引受で、松田源之助・小川守衛・二階堂理介・成瀬虎一郎が軍用玉製造、今泉馬一郎・加幡直太郎が生兵取立方で、それぞれ褒賞されている⁴⁴⁾宗城の率いる藩兵は少人数であったが、精選された陣容であった。

12月23日、田中幸助（中井弘）が来て、8日以降の情勢について話した。「当時薩ハ是非々々用兵力候見込」であり、徳川家の政権返上、さらに將軍職の廃止されたが、朝廷には「政務兵備之費用」がないため削封が命ぜられた。これを甘受すればよいが、違背すれば征伐するという。土佐藩は政務兵備の分担はよいが、削封は反対という。薩土両藩の意見が対立し、「他十藩」も土佐藩

(容堂)の意見であると言った。宗城は今日着京した次第で、今初めて明白になった。「先ツ土論同意」と言った。翌日高崎左京も来て、同じく「過ル八日前より薩ニ而ハ以兵威推参」, 8日参内して長州父子と五卿の入洛を許可し、「摂関幕府等廃絶」等に至る事情を話した。この日、宗城は参内して大政返上、辞官納地の話を聞き、「御所之御振合、大御変改を見上候而、恐愕仕居候位の事故、是非得失等難申上、乍然追々 御沙汰モ被為在候通、何分公明正大、衆議之帰スル処ニ御取極」と、慎重に事態を処理するよう言った。宗城は徳川家の辞官納地ではなく、容堂同様に諸大名による石高に応じた政費の分担を考えていた。

26日、後藤象二郎が来て、上下議事院を早急に設立しなくては、王政復古も「有名無実、且私論偏党ヲ不免候」と考えて陳論していると言い、宗城も協力を約束した。27日になると、長州藩兵が入京し、薩摩藩兵とともに練兵をした。28日、宗城は總裁有栖川宮から小御所中段で議定を命ぜられた。この日、さらに容堂に会い、「小松^(ママ)胸等ハ西郷始トハ異論也」、開戦となっても小松は傍観すると見通している。討徳川の主張は「大芋(○久光)しらぬ事ニ可有之」と、既定的観側を2人はしている。旧公武合体派大名の糾合によって解決できる事態ではなかった。29日、春嶽も晦日に上京と知らせ、「内府公恭順英断ニ而相整候義奉感服候事」と言い、慶喜には開戦の意志なしと考えられている。しかし、25日、薩摩藩江戸屋敷の焼き打ちとともに事態は一変し、大坂城でも薩摩と開戦の論議が衆議一致した。

王政復古から鳥羽・伏見の戦いの開始当時の宗城の政局観をさいごに見ておきたい。慶応4年正月朔日、宗城は参内し三条実美に面会した。三条は宗城に慶喜の辞官納地の受諾を話し、新政府の軍備の確立の必要を説き、公論では「急ニハ不整と愚考」と言った。宗城は「如何様尾越より御請申上而も無際限、此俟にてハ不相済」としながら、「御書付の夫々之公論ヲ以ト御坐候文字」を、總裁宮始めどう考えているのか、議定役が相談して決定しても他から異論が出よう、「何れにも万機之出る所ハ、仮ニ御処置の三御役、其御役々一坐衆議公論

ヲ可陳，議政所早々被相定度」と、持論の公議政体論を陳述している。岩倉具視は朝幕の対外認識についての相異点，長州戦争の結果今日の事態となった。王政復古の上は「是迄之義者一洗致，幕も出長も出候而，皆共々協力致候」必要があると言った。宗城はこれに対し、「唯今貴所様之御論に対し候而ハ，先枝葉と存候」と反論している。宗城は国家の基本を建てることと，長州討幕派を「王政」のなかに直ちに取り込むことに反対しているのであろう。

正月2日，慶喜は討薩表を持たせて大軍を京都に向けて進発させ，3日には鳥羽・伏見の戦いとなるが，この戦闘について，宗城は容堂とともに，「是全私闘之義」，「朝敵之事，是非之論決も無之暴挙」とし，「朝敵トハ公平之義ニ無之」と反論している。尾張藩・越前藩も戦争に反対であった。宗城は議定職の辞任を願い，容堂・浅野茂勲も同調した。しかし，戦闘は拡大して戊辰戦争となった。

おわりに

王政復古を以って幕末史はその終局を迎え，同時に維新史，明治国家形成の発端となる。そのため，まずは廃藩置県，西南戦争までは視野に入れて，宇和島藩の終局と伊達宗城の政治・外交活動を考える必要がある。それらの今後の研究のために考慮すべき諸点について簡単に述べて，まとめとしたい。

宇和島藩は幕末期において，きわめて藩主権力とその統制力が強く，藩主脳部の門閥制も，版籍奉還における藩制改革までは崩れなかった。もちろん，庄屋層からの上士・中士への登用はかなり見られるのだが，それらから改革派の形成ないし同盟はなく，したがって藩内抗争による活性化もその犠牲者もなかった。これは，他の雄藩等と比較しても明瞭なところであり，藩独自のイデオロギーの形成も弱かったということになる。

さらに，幕長戦争において避戦の態度をとった宇和島藩は，戊辰戦争においても，新政府は藩兵500人の羽州表・箱館戦争への派兵を命じたにも拘わらず，うち100人は吉田藩に肩替えし，両藩は八幡浜・三机まで出兵し，そこからは幕長戦争時と同じように帰藩した。このため，宇和島藩は幕末・維新史を通じ

て1人の殉難者も出さず、藩財政も破局を迎える事態にはならなかった。しかし、戊辰戦争に派兵しなかったため、宗城は新政府から議定を免ぜられた時期もあり、藩内でも家老松根図書・桜田出雲が解任されている。通説に従えば、戊辰戦争に参加してはじめて、新政府の信任の度合も定まったであろう。

宇和島藩の周縁を見ると、宗城の弟宗孝が藩主であった分藩の吉田藩は明らかに佐幕派であり、宇和島藩の本家筋である仙台藩は奥羽越列藩同盟の盟主となり、藩祖秀宗の妻の実家である彦根藩井伊家は、鳥羽・伏見の戦いの初期までは、徳川宗家に忠実な譜代大名であった。宗孝は宗城・宗孝の実兄である旗本山口丹波守直信二男宗敬に譲封し、仙台藩主伊達慶邦は宗城の次男宗敦（経丸・徳治）の嗣となった。宗敦は藩主にはならなかったが知藩事となり、のちに一家を立てた。宗城は維新时期に、自藩の内部事情と同時に親族の諸藩の説得も必要としたのである。

以上の宇和島藩の置かれた維新当初の実情にも拘らず、宗城は新政府の高官として栄進していく。明治元年正月3日軍事参謀、同月27日大阪裁判所副総督、閏4月21日外国官知事となる。そして、神戸事件・堺事件等の外交的難題の処理に当たった。同2年9月12日民部卿兼大蔵卿となり、新政府の財政問題を担当し、同4年4月27日、欽差全権大使として、日清修好条規締結のため、娘婿の柳原前光とともに渡清したが、条約の内容を新政府に非難されて解任され、これで宗城の政治生命は終わった。あとは華族としての道を究極まで登っていく。宗城の栄達にもかかわらず、宗城には藩閥の基盤がなく、薩長閥の五代才助、中井弘、伊藤博文らに依存することが多かった。また、宇和島藩出身の政府官僚も、宗城の解任と同時に多く帰郷してしまう。つまり、明治国家を支える藩閥勢力になることはなかった。

一方、藩内において、幕末期から多発しはじめていた村方騒動は、明治3年春、野村騒動・宇和騒動のような世直し一揆の展開するなかで、従来の農民支配体制の改編を迫られ、廃藩置県後も徴兵令・地租改正反対一揆、無役地事件など、西伊予地方では農民騒擾が続いた。廃藩置県前後の藩の農村対策も、さ

らに研究課題の一つとなろう。

さいごに、薩長土肥につぐ藩閥形成が不可能であった宇和島藩からは、佐賀藩士楠田英世の信任を得た児島惟謙、法学者となる積積陳重(入江邑次郎)、言論界の末広重恭(鉄腸)・西河通徹、政治家清水隆徳、文学における大和建樹・中野逍遙ら多くの明治・大正期の人材について、まずその伝記研究を確立し、その人材交流と全国的活動についてまとめていくなれば、新しい研究が展開してくるであろう。ともあれ、幕末維新期の研究は、地域社会的視点と同時に、全国的ないし世界史的視野での研究が必要とされているといえよう。

注

- 1) 「竜山公記」巻20 9月朔日条
- 2) 同 9月8・9日条
- 3) 平尾道雄『山内容堂』127ページ
- 4) 「竜山公記」巻20 9月18日条
- 5) 同 9月22日条
- 6) 同 9月28日条
- 7) 同 巻21 10月2日条
- 8) 同 10月7日条
- 9) 同 10月9日条
- 10) 『松根図書関係文書』(『宇和島・吉田旧記第7輯』)110ページ
- 11) 前掲書 143ページ
- 12) 「竜山公記」巻21 10月29日条
- 13) 同 巻22 11月2日条
- 14) 同 11月12日条
- 15) 同 11月18日条
- 16) 同 11月22日条
- 17) 同 巻23 12月2日条
- 18) 一口 15貫800目 引両横麻上下・同帷子
 二口 31貫600目 浅井万兵衛次席、外笹諸麻上下両様の内
 四口 63貫200目 清水甚左衛門等順列、同上
 七口 110貫600目 緒方陸之助等順列
 十三口 205貫400目 松浦隼之助等順列

二十口 316 貫 同人座上之家

三十口 474 貫 代々右同断，其身限御徒取扱

袴着用者が一口加入の場合，其身限り庄屋格苗字御免

庄屋格の者が一口加入の場合，目見苗字御免

庄屋格苗字御免の者が一口加入の場合，目見帯刀御免

19) 「竜山公記」巻 23 12 月 12 日条

20) 同 巻 24 12 月 16 日条

21) 同 12 月 17 日条

22) 同 12 月 19 日条

23) 同 12 月晦日条

24) 「藍山公記」巻 5 の 10 9 月 15 日条

25) 『伊達宗城在京日記』431 ページ～ 「慶応二丙寅九月七日上京勅命ヨリ手留」。以下特に注記しないものはこの「手留」による。

26) 「藍山公記」巻 5 の 10 9 月 20 日条

27) 『徳川慶喜公伝』巻 6 464 ページ

28) 「藍山公記」巻 5 の 10 11 月 7 日条

29) 同 巻 5 の 11 2 月 27 日条

30) 井上清『西郷隆盛』(上) 204 ページ，中公新書

31) 『一外交官の見た明治維新』，『遠い崖』参照

32) 「藍山公記」には『在京日記』が多く引用され，ほとんど同一記事である。

33) 同書巻 5 の 13 5 月 23 日条に「正二位公御履歴」から引用された若松幹太郎書翰がある。宗城のパークス，サトウからの情報収集を示す好史料のため記載しておく。

過ル十六日貴翰相達，難在拝見位候処，段々暑氣相催候得共，弥御堅固被成御勤候趣奉慶賀候，扱ミニストル敦賀へ罷越候節，途中より引返し候様御話申上候処，右者全ク虚説ニ而，先月廿二日帰坂仕，廿三日出帆仕候，サトウ義も先月廿八日着府仕候，敦賀開鎖一件，委細承合せ申候処，場所柄不宜ニ付相開不申候様申居候，右仁，遠州掛川宿へ相泊候節，夜中例幣使襲参り，大ニ混雜仕候処，野口(○富蔵，サトウの従者)大ニ相働キ，右之者共不殘逃去候由，英人並付添之者も怪我も無御座候，近日ミニストル箱館へ罷越，夫より長崎へ相廻り，又々上坂仕候趣，サトウ野口も同様ニ御座候，何レ来月下旬ニハ着坂仕可申候，余ニ格別新聞も無御座候得共，貴答旁如此御座候，恐惶謹言

五月廿三日

若松幹太郎

都築莊蔵様

別紙ニ

私儀も近日横浜へ引越修行仕可申と奉存候間，以来何等御用御座候節ハ，矢張当地御屋敷へ御遣し被成下候ハ，早速相達可申候，為念一寸書添申上候，以上

封上

京都寺町通四条下ル
宇和島本陣大雲院ニ而
都築莊蔵様

貴答

江戸高輪英国接遇所
若松幹太郎

- 34) 『徳川慶喜公伝』巻7 99 ページ 677
 35) 「藍山公記」巻5の14 6月6日条(「御履歴」)
 36) 同 6月28日条(同)
 37) 『幕末維新の洋学』(『大久保利謙著作集』5) 参照
 38) 萩原延寿『遠い崖』5『外国交際』238 ページ。西郷はサトウに武力討幕を示唆している。
 参考 「藍山公記」巻5の15 「御履歴」を引用。

謹而奉言上候、然は壯蔵儀、昨廿日朝着坂仕、其後彼是探索仕候処、陸路通行之英人三名、昨廿日伏見泊、今日当地到着之都合ニ御座候旨、尤右三名之内菅人は薩道之趣ニ御座候、尤旅宿も当夏同様中寺町本覚寺ニ御座候、右之件ニ幕府英人掛^(まもる)リ之御方江手合を以承合候ニ付、相違は無御座儀ニ御座候、何れ明朝船越洋之助(○衛、広島藩士、大村益次郎の門弟で長幕和解に奔走、壯蔵とともに下坂していた)同行、夷館江可罷出と奉存候、且又今午後洋之助同行、各国在留之為所設罷成候土地(○大坂カ)見聞之為罷越候都合ニ仕居候、只今承候得は天保山洋江夷船壱艘入津、迎船等も罷越候趣ニ御座候、未得確證候得共、多分虚説ニ者有御座間敷と奉存候、余者追々取調可奉言上候、誠恐誠惶頓首百拝敬白

七月廿一日

都築壯蔵

封上 (○宗城宛)

- 39) 「藍山公記」巻5の16 9月10日条
 40) 同 10月3日条
 41) 『徳川慶喜公伝』巻7 175 ページ
 42) 「藍山公記」巻5の16
 43) 同 巻5の17 11月2日条
 44) 同 巻5の18 12月12日条